A 155　加工食品に関する研究（第3報）　――ハンバーグ――

聖徳学園女子短大　高井富美子　出羽京子　古橋優子
村岡敏子　○西脇泰子

目的　加工食品・半調理済食品は、一般家庭・飲食店・学校給食その他の集団給食の場において、使用回数がふえており、その中でもハンバーグの伸びは著しく、生産高は昭和49年から55年までの7年間に1.6倍に増加している。我々は、幼稚園児・児童を対象とし、使用状況・イメージさらに栄養摂取量等について比較・検討した。

方法　昭和56年6月19日～6月27日の期間に、岐阜市内の幼稚園児50名を対象に、イメージの測定・摂取形態ほか43の項目に対する食生活の意識を調査し、ラザースフェルドの解法により潜在クラス分析（Latent class analysis）を行い、アンケートの集計を試みた。

結果　①年収別に集計した結果、年収が多くなるに従って、食費にかける割合が多く、また、食生活重視型・軽視型に分けた場合、重視型の方が食費にかける割合が多かった。
②幼稚園児の中では、加工したハンバーグの方がおいしいと思っている者が約35％あり、特に、食生活軽視型の方でその傾向が顕著にみられた。
③食生活重視型はハンバーグに対して、まずくて、体のために悪く、栄養価が低く、不衛生であるというイメージを持っており、食生活軽視型は、体のために悪くなく、値段が高く、若者向きであるというイメージを持っていた。